

# 農商工連携による小豆の販路開拓と収穫体系の確立

## 西部農業改良普及所

### 1. 取組の背景

管内の平坦部の農業は水田が主体であり、これまで主に大豆、飼料作物を転作作物として栽培してきた。近年、地域の農業従事者の高齢化、後継者不足から大規模経営体に水田が集積される傾向が強まってきている。この大規模経営体のうち農業生産法人Aから新しい転作作物として小豆（種皮の赤いもの。以降「小豆」という）の生産・販売を模索するにあたって、普及所の助言等を求められた。

平成20年の取組当初、販売先として地元のお菓子製造業者と連携していたが、お菓子メーカーの取引量が減じたため、まとまった量の販売先がなくなるとともに農業生産法人Aも小豆生産から撤退するという取り組みの挫折があった。

その後、平成23年に企業誘致により県外から新たなお菓子製造業者が管内に進出することが決まり、地元産小豆の需要が生まれた。併せて、県内で、ほとんど栽培されていない白小豆（種皮の白いもの。以降「白小豆」という）の供給も打診された。この新たなお菓子製造業者（以降「実需者」という）からの要望に応えるため、新たに小豆・白小豆栽培を希望する生産者B氏と生産・販売における諸課題の解決に取り組んだ。

管内の小豆・白小豆の生産・販売における課題は以下の7点に整理される。

#### (1) 生産における課題

- ア 小豆は、降雨、干ばつの影響を受け易く年ごとの収量が安定しない。
- イ 小豆は収穫・調製の機械化が進んでおらず、県内では、手作業での収穫・調製が主体であるため、数量の確保と産地形成が困難である。
- ウ 実需者によって種皮の厚さや粒の大きさなど求められる品質が異なる。
- エ 白小豆は県内での栽培知見がなく、基本的な特性を把握する必要がある。

#### (2) 販売における課題

- ア 実需者の求める選別度合を達成することが必要である。
- イ 生産者が再生産できる単価が必要である。
- ウ 農協等を介さない直接取引の場合、生産者と実需者が相互に意思疎通できる場の形成が必要である。

### 2. 活動内容

#### (1) 生産における課題解決のために

##### 1年目（平成24年度）

- ア 収穫作業の機械化と密植栽培におけるコンバイン刈りの適性を検討するため、B氏のほ場に小豆実証ほを設置し調査を行った。
- イ 同時に白小豆の栽培特性把握のため、B氏ほ場を実証ほとして調査した。



写真1：平成24年9月左半分が密植区

写真2：平成24年11月コンバイン収穫



写真3：コンバイン収穫跡

写真4：コンバイン収穫した小豆

## 2年目（平成25年度）

- ア 平成24年に実施した小豆の機械収穫体系の継続検討に加え、白小豆の特性把握と機械収穫体系を検討するための実証ほを設置した。
- イ 播種前の打合会で申し合わせたほ場巡回を10月に県下全域で実施した。
- ウ 11月に実需者の立会いのもとコンバイン収穫した。コンバインの収穫ロスを農業試験場と共同で調査した。

## (2) 販売における課題解決のために

### 1年目（平成24年度）

- ア 実需者からの依頼に対して、平成23年産のサンプル提供を行った。
- イ 8月、11月に実需者、生産者を交えたほ場巡回及び意見交換会を行った。
- ウ 11月に小豆（無選別約60kg）、白小豆（無選別約30kg）を実需者へサンプル供給した。実需者の方で選別した結果、小豆で製品率63.0%、白小豆で80.7%となった。選別経費は3,300円/60kgとなった。

### 2年目（平成25年度）

- ア 6月に実需者と生産者の間で契約及び出荷形態等に関する打合会を実施した。契約書の書式について、生産者から案を提示し実需者側で協議してもらうこととなった。平成25年産については、予約注文書で契約書の代替とすることとなり、出荷形態等についても申し合わせを行った。

イ B氏が県の補助事業を活用して色彩選別機を導入するにあたって経営計画等に助言を行った。

ウ 12月に実需者と生産者の間で製品の確認及び出荷日程・形態等に関する打合せを実施し、平成26年1月に実需者の米子工場への納品が完了した。

### 3. 具体的な成果

#### (1) 生産について

- ・実証ほを調査した結果、小豆のコンバイン収穫が可能であること、密植栽培は、コンバイン刈りの収穫ロスが少なく、収量向上に寄与することが確認された。
- ・平成25年産小豆は、目標収量（目標100kg/10a、実績135kg/10a）を達成した。

#### (2) 販売について

- ・平成23年産小豆のサンプル提供の結果、実需者から加工適性（色、種皮の堅さ等）があるとの評価を得た。
- ・平成24年産小豆及び白小豆のサンプル提供の結果、平成25年産の取引が正式に決まった。
- ・平成25年産小豆及び白小豆の出荷実績を作った。

### 4. 農家等からの評価・コメント（米子市淀江町B氏）

技術体系の整理等について、普及所との連携には満足している。特に、中耕培土を行わないことで、コンバイン収穫によるロスを軽減できることや、密植栽培による収量向上が確認できたのは成果だと思う。自己評価としては、まだ、生産面、販売面でも課題が多くあると思うので改善していきたい。

また、今後の産地形成には、市、JAによる新たな特産品としての位置づけを期待したい。

### 5. 現状・今後の展開等

- ・白小豆は、未だ収量が低く、栽培知見も不十分であるため、当面、収量向上を柱とした基礎技術の蓄積を行う。
- ・実需者の希望数量と地元産への要望は強く、この取引の機会を十分に活かすには、小豆、白小豆ともに数量の確保が喫緊の課題である。この数量確保には生産者の確保は必須であり、栽培希望者の呼びかけを行う。
- ・小豆は、品種として確立されたものが少なく、地域固有の在来種は付加価値を見出せると考えられる。そこで在来小豆の探索を行うことも産地形成の長期的な計画には必要である。

（執筆者：山根 淳）